

低温と遅霜に関わる農作物への技術対策について

平成22年5月11日
農業技術課

1 作物

(1) 水稲

ア 育苗中の苗については気温の変化に留意し、低温時には育苗ハウスの加温や保温シートの苗箱への被覆など、苗の生育に合わせた温度管理を徹底する。

イ 早朝低温であっても日中が高温となった場合、施設内や被覆資材下の温度が急上昇してムレ苗などの生育障害が発生する恐れがあるため、施設の換気に十分注意し温度管理の徹底を図る。

ウ 移植にあたっては苗の生育状況や気象状況に留意し活着適温（平均気温14℃以上）になってから行う。

また、移植後も夜間深水、日中浅水とするなど適正な水管理により活着促進を図る

(2) 麦類

5月10日頃から開花期になると予想されるため、開花期の赤かび病防除を徹底する。

2 果樹

(1) 防霜ファンの設置園では、防霜ファンが稼働するように、スイッチや温度設定を確認する。稼働するか心配な場合は、事前に日中試験稼働させてみる。

(2) 霜道など凍霜害にあいやすい場所では、燃焼法などにより対策を徹底する。

(3) 品目や品種により凍霜害の様相が異なるので、被害に遭いやすい果樹類は対策を徹底し、生産量確保を図る。

(4) 現在までの各品目の状況と、予想される被害は以下の通りであるので、自園で被害あるいは経営上の影響が大きいと予想される樹種から優先して対策を行う。

ア 今までの低温で、あんず、おうとう、すもも、ネクタリン、和なし（「南水」など）、りんご（「シナノゴールド」、「秋映」、「ふじ」など）が被害を受けている傾向である。被害の大きな園地では、今回も被害が心配されるので、対策を徹底し被害の拡大を防ぐ。

イ りんご「つがる」、「秋映」、「ジョナゴールド」などではサビ発生が心配されるので、摘果の際には注意する。

ウ かきやぶどうでは、新梢枯死の被害が心配される。

エ ももでは、凍霜害被害等で結実量が減少すると、核割れ等が発生しやすい。

(5) 降霜時の早朝は、果面障害等の心配があるので、薬剤散布を控える。

3 野菜

(1) 葉野菜類（レタス類、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、はくさい等）
不織布等のべたがけが可能な場合は、低温の予想される日の前日に被覆を行う。

(2) アスパラガス

ア 露地で不織布や保温資材によるトンネル被覆の対応が可能な場合は、低温の予想される日の前日に被覆を行う。ハウスでは、早期に閉め、保温に努める。

イ 翌朝に凍霜害が予想される場合、通常の出荷規格に満たない若茎であっても収穫し出荷するか否かの検討を、事前に出荷団体等と行う。

(3) スイートコーン

本葉2枚程度までは生長点が地中にあり、被害が少ない。本葉3～4枚以降の生育ステージでは生長点が地上にあり、生長点の壊死を起こしやすい。このステージのものについて、不織布等のべたがけが可能な場合は、低温の予想される前日に被覆を行う。

(4) ジュース用トマト

翌朝に低温が予想される場合には、定植日を延期する。やむを得ず定植する場合は不織布等のべたがけを行う。

(5) 露地きゅうり、ピーマン

ア 翌朝に低温が予想される場合には、定植日を延期する。その際に、苗の順化期間を延長するが、老化苗にならないよう注意する。

イ 露地栽培で、既に定植済みの場合は、トンネル被覆を行う。この際ビニール、ポリエチレンフィルム被覆に加えて、育苗用保温マット、こも等の保温資材を利用した方が保温効果は得られる。

(6) 施設きゅうり、トマト、カラーピーマン

ハウスを早期に閉め、保温に努める。可能であれば加温を行う。

(7) すいか

ア 翌朝に低温が予想される場合には、定植を延期する。やむを得ず定植する場合は二重被覆等を行う。

イ 整枝栽培で中間整枝を行う場合、低温の予想される期間はトンネル内につるを収め、低温期間を過ぎてからトンネル外へつるを引き出す。

(8) 夏秋イチゴ

翌朝に低温が予想される場合は、ハウスを早期に閉め、保温に努める。

4 花 き

(1) 植え付け後のシテッポウウリ等は、不織布などをトンネル被覆している場合、降霜の心配がなくなるまでそのままとする。

(2) ハウスなどの施設では最低気温が保てるように、カーテンや多層被覆などにより保加温に努める。降霜のあった当日は、日中気温が上昇するため換気には注意する。

(3) 露地栽培の品目では降霜に備えて、可能なところでは霜除けのために不織布等のべた掛け資材を被覆する。ただし草丈の伸びた品目では花茎の曲がり等が生ずる場合が想定されるので注意する。

5 飼料作物

(1) 飼料用トウモロコシのは種期の目安は平均気温10℃以上であるため、気象状況を考慮しながらは種を行う。

(2) ソルガム類は飼料用トウモロコシよりもは種期の平均気温は高く、15℃以上必要であるので、早播きは避ける。

(3) 牧草収穫や放牧地への入牧も気象及び牧草生育状況に応じて行う。

6 茶

- (1) 寒冷しゃ等をトンネル被覆し、新芽を保護する。
- (2) 防霜ファンが利用できるところでは、防霜ファンを利用する。